

『私に影響を与えた1冊』

Michiko Kawaguchi

子供の頃、最初に買ってもらった本は「イエスキリスト」の伝記だった。

この子大丈夫かしら…？両親は苦笑しつつ、すこしだけ真剣にそう思ったに違いない。

私は、人の生き様というものに異様に関心を持っていたようだ。

しかし、その初っ端がキリストというのは、かなりシビかったかもしれない。

自分で言うのも何だが、私はスーパー優等生だった。

しかも‘スポーツもできる優等生’というヤツ。

中学2年生まで、間違いなく自分の将来の未来予想図は既に出来上がっていた。

一方で、あるラジオ番組をきっかけに音楽と衝撃の出逢いをしてしまったのは10歳のとき。

その瞬間「音楽が私の人生だ！」と閃き、想いは年々募っていった。

時は1978年頃…フュージョンブーム到来。

それまで音楽の世界でスターといえば歌い手に決まっていたのに、ひとりの管楽器奏者、

しかも‘オジサン’がスターになっていた。

その人は、現在も日本を代表するサックス奏者である‘ナベサダ’こと、渡辺貞夫さんである。

…何てカッコイイのだろう。

私は人とは違ったこと、未開拓の分野にチャレンジする生き方をしたかった。

当時女性サックス奏者など皆無に近い…。

‘これだ！これしかない！’さらに想いを深めた。

とはいって、優等生だった私は進路に迷いながらも予想通り、偏差値の高い高校への合格と引き換えに、

両親に楽器を買ってもらう約束を取り付けた。そして合格を果たした。

卒業式の日。実は、担任教師は私を小さい頃から知っている人だった。

かつてのピアノの先生の奥さんが、卒業年の担任教師など、めったにない縁だろう。

式が終わり、人がひけた頃合を見計らって、先生に職員室に呼ばれた。

「卒業おめでとう。これからも頑張って。これ、（内緒の）お祝いね！」と

ちょっと厚めの封筒を手に押し込んでくれた。

中身は過分なほどの図書券。

驚き感謝しつつ、内心は嬉しさという純粋さを通り越し、ニンマリというのがぴったり。

翌日、その図書券で手に入れたのが、渡辺貞夫さんの自伝「ぼく自身のためのジャズ」だ。

情報など簡単に手に入らない時代、この本のことは知らなかった。

‘自分の音楽人生のスタートを切るにあたって、何か読みたい。読んで前に進みたい！’

そんな気持ちで巡り合い、その後の人生を決めた大事な一冊である。

当時15歳。今ページを開いてみても、耳慣れないジャズ用語や人物名がたくさん出てくる。

活字も小さく体裁もなかなか硬い。

それでも一気に読ませてしまったのは、やはり貞夫さんが織りなす生き様というストーリーが、あまりにも魅力的だったからに尽きる。

一音楽とは君自身の経験であり、君の思想であり君の知恵なのだ。もし君がまことの生活を送ら

なければ、

君の楽器は真実のひびきをもたないであろう。—

冒頭にアルトサックスの巨人、チャーリーパーカーのこの言葉が引用されているこの本に、
あの日思いがけず図書券を戴き、

一生懸命‘自分にとっての’何かの本‘を探さなければ巡り会うこともなかっただろう。

あれから30年余り。私はサックスを吹き続けている。

想いは今も心に変わらず持ち続けている。